

眉かくしの霊

泉鏡花

青空文庫

木曾街道、奈良井の駅は、中央線起点、飯田町より一五八哩二、海拔三二〇〇尺、と言い出すより、膝栗毛を思う方が手つ取り早く行旅の情を催させる。

ここは弥次郎兵衛、喜多八が、とぼとぼと鳥居峠を越すと、日も西の山の端に傾きければ、両側の旅籠屋より、女ども立ち出でて、もしもお泊まりじゃござんしないか、お風呂も湧いていずに、お泊まりなお泊まりな——喜多八が、まだ少し早いけれど……弥次郎、もう泊まつてもよからう、のう姐さん——女、お泊まりなさんし、お夜食はお飯でも蕎麦でも、お蕎麦でよかあ、おはたご安くして上げませず。弥次郎、いかさま、安い方がいい、蕎麦でいくらだ。女、はい、お蕎麦なら百十六銭でござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんならそうときめて泊まつて、湯から上がると、その約束の蕎麦が出る。さつそくにくいかかつて、喜多八、こつちの方では蕎麦はいいが、したじが悪いにはあやまる。弥次郎、そのかわりにお給仕がうつくしいからいい、のう姐さん、と洒落かかつて、もう一杯くんねえ。女、もうお蕎麦はそれぎりでござんさあ。弥次郎、なに、もうねえのか、

たつた二ぜんずつ食つたものを、つまらねえ、これじゃあ食いたりねえ。喜多八、はたごが安いも凄まじい。二はいばかり食つていられるものか。弥次郎……馬鹿なつらな、銭は出すから飯をくんねえ。……無慙や、なけなしの懐中を、けつく蕎麦だけ余計につかわされて悄気返る。その夜、故郷の江戸お筆筒町引出し横町、取手屋の鍛兵衛とて、工面のいい馴染に逢つて、ふもとの山寺に詣でて鹿の鳴き声を聞いた処……

……と思うと、ふとここで泊まりたくなつた。停車場を、もう汽車が出ようとする間際だつたと言うのである。

この、筆者の友、境贄吉は、実は薦かずら木曾の棧橋、寢覚の床などを見物のつもりで、上松までの切符を持っていた。霜月の半ばであつた。

「……しかも、その（蕎麦二膳）には不思議な縁がありましたよ……」
と、境が話した。

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、この線の汽車は塩尻から分岐点で、東京から上松へ行くものが松本で泊まつたのは妙である。もつとも、松本へ用があつて立ち寄つたのだと言えば、それまででぎつと済む。が、それだと、しめくりが緩んでちと辻褄が合わない。何も穿鑿をするのではないけれど、実は日数の少ないのに、汽車の遊びを貪

つた旅行で、行途は上野から高崎、妙義山を見つつ、横川、熊の平、浅間を眺め、軽井沢、追分をすぎ、篠の井線に乗り替えて、姨捨田毎を窓から覗いて、泊りはそこで松本が予定であった。その松本には「いい娘の居る旅館があります。懇意ですから御紹介をしましょう」と、名のきこえた画家が添え手紙をしてくれた。……よせばいいのに、昨夜その旅館につくと、なるほど、帳場にはそれらしい束髪の女が一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中で。……さてその紹介状を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない。この霜夜に、出しがらの生温い渋茶一杯汲んだきりで、お夜食ともお飯とも言い出さぬ。座敷は立派で卓は紫檀だ。火鉢は大きい。が火の気はぼつちり。で、灰の白いのにしがみついて、何しろ暖かいものでお銚子をと云うと、板前で火を引いてしまいました、なんにも出来ませんと、女中の素気なさ。寒さは寒し、なるほど、火を引いたような、家中寂寞とはしていたが、まだ十一時前である……酒だけなりと、頼むとおあいにく。酒はないのか、ござりません。——じゃ、麦酒でも。それもお気の毒様だと言う。姐さん……、境は少々居直つて、どこか近所から取り寄せてもらえまいか。へいもう遅うござりますで、飲食店は寝ましたでな……飲食店だと言やあがる。はてな、停車場から、震えながら俵でくる途中、ついこの近まわりに、冷たい音して、川が流れて、

橋がかかつて、両側に遊廓らしい家が並んで、茶めしの赤い行燈もふわりと目の前にちらつくのに——ああ、こうと知つたら軽井沢で買った二合鑊を、次郎どのの狗ではないが、皆なめてしまうのではなかつたものを。大歎息とともに空き腹をぐうと鳴らして可哀な声で、姐さん、そうすると、酒もなし、麦酒もなし、肴もなし……お飯は。いえさ、今晚の旅籠の飯は。へい、それが間に合いませんので……火を引いたあとなもんでなあ——何の怨みか知らないが、こうなると冷遇を通り越して奇怪である。なまじ紹介状があるだけに、喧嘩面で、宿を替えるとも言われない。前世の業と断念めて、せめて近所で蕎麦か饅頭の御都合はなるまいか、と恐る恐る申し出ると、饅頭なら聞いてみましょう。ああ、それを二ぜん頼みます。女中は遁げ腰のもつたて尻で、敷居へ半分だけ突き込んでいた膝を、ぬいと引つこ抜いて不精に出て行く。

待つことしばらくして、盆で突き出したやつを見ると、井がたつた一つ。腹の空いた悲しさに、姐さん二ぜんと頼んだのだが。と詰るように言うと、へい、二ぜん分、装り込んでございます。いや、相わかりました。どうぞおかまいなく、お引き取りを、と言うまでもなし……ついと尻を見せて、すたすたと廊下に行くのを、継児のような目つきで見ながら、抱き込むばかりに蓋を取ると、なるほど、二ぜんもり込みだけに汁がぼつちり、

餛飩は白く乾いていた。

この旅館が、秋葉山三尺坊が、飯綱権現へ、客を、たちものにしたところへ打撞つたのであろう、泣くより笑いだ。

その……餛飩二ぜんの昨夜を、むかし弥次郎、喜多八が、夕旅籠の蕎麦二ぜんに思い較べた。いささか仰山だが、不思議の縁というのはこれで——急に奈良井へ泊まってみたくなつたのである。

日あしも木曾の山の端に傾いた。宿には一時雨さつとかかった。

雨ぐらいの用意はしている。駅前のは便らないで、洋傘で寂しく凌いで、鴨居の暗い檐つたいに、石ころ路を辿りながら、度胸は据えたぞ。——持つて来い、蕎麦二膳で、昨夜の餛飩は暗討ちだ——今宵の蕎麦は望むところだ。——旅のあわれを味わおうと、硝子張りの旅館一二軒を、わざと避けて、軒に山駕籠と干菜を釣るし、土間の竈で、割木の火を焚く、侘しそうな旅籠屋を鳥のように覗き込み、黒き外套で、御免と、入ると、頬冠りをした親父がその竈の下を焚いている。框がだだ広く、炬が大きく、煤けた天井に八間行燈の掛かったのは、山駕籠と対の注文通り。階子下の暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

「いらつせえ。」

蕎麦二膳、蕎麦二膳と、境が覚悟の目の前へ、身軽にひよいと出て、慇懃に会釈をされたのは、焼麩だと思ふ（しつぽく）の加料が蒲鉾だったような気がした。

「お客様だよ——鶴の三番。」

女中も、服装は木綿だが、前垂がけのさっぱりした、年紀の少い色白なのが、窓、欄干を覗く、松の中を、攀じ上るように三階へ案内した。——十畳敷。……柱も天井も丈夫造りで、床の間の詠えにもいささかの厭味がない、玄関つきとは似もつかない、しつかりした屋台である。

敷蒲団の綿も暖かに、熊の皮の見事なのが敷いてあるは。ははあ、膝栗毛時代に、峠路で売っていた、猿の腹ごもり、大蛇の肝、獣の皮というのはこれだ、と滑稽た殿様になつて件の熊の皮に着座に及ぶと、すぐに台十能へ火を入れて女中さんが上がつて来て、惜し気もなく銅の大火鉢へ打ちまけたが、またおびたらしい。青い火さきが、堅炭を搦んで、真赤に烘つて、窓に沁み入る山風はさつと冴える。三階にこの火の勢いは、大地震のあとでは、ちと申すのも憚りあるばかりである。

湯にも入った。

さて膳だが、——蝶ちようあし脚の上を見ると、蕎麦扱いにしたは氣恥ずかしい。わらさの照焼はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚焼の玉子に、椀わんが真白な半ぺんの葛くずかけ。皿さらについたのは、このあたりで佳品かひんと聞く、鶉つぐみを、何と、頭かしらを猪口ちよくに、股またをふつくり、胸を開いて、五羽、ほとんど丸焼にして芳かんばしくつけてあつた。

「ありがたい、……実にありがたい。」

境は、その女中に馴なれない手つきの、それも嬉うれしい……酌しやくをしてもらいながら、熊に乗つて、仙人せんじんの御馳走ごちそうになるように、慇懃いんぎんに礼を言った。

「これは大した御馳走ですな。……実にありがたい……全く礼を言いたいなあ。」

心底しんそこのことである。はぐらかすとは様子にも見えないから、若い女中もかけ引きなしに、

「旦那だんなさん、お気に入りまして嬉しゅうございますわ。さあ、もうお一つ。」

「頂戴ちやうだいしよう。なお重ねて頂戴しよう。——時に姐ねえさん、この上のお願いだがね、……どうだろう、この鶉つぐみを別に貰もらつて、ここへ鍋なべに掛けて、煮ながら食べるといふわけには行くまいか。——鶉つぐみはまだいくらかあるかい。」

「ええ、筍さるに三杯もございます。まだ台所の柱にも束にしてかかっております。」

「そいつは豪氣だ。——少し余分に貰いたい、ここで煮るように……いいかい。」

「はい、そう申します。」

「ついでにお銚子を。火がいいから傍へ置くだけでも冷めはしない。……通いが遠くて気の毒だ。三本ばかり一時に持つておいで。……どうだい。岩見重太郎が註文をするようだろう。」

「おほほ。」

今朝、松本で、顔を洗った水瓶の水とともに、胸が氷に鎖されたから、何の考えもつかなかつた。ここで暖かに心が解けると、……分かつた、餛飩で虐待した理由というのが——紹介状をつけた画伯は、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信州路を経歴つて、その旅館には五月あまりも閉じ籠もつた。滞る旅籠代の催促もせず、帰途には草鞋銭まで心着けた深切な家だと言つた。が、ああ、それだ。……おなじ人の紹介だから旅籠代を滞らして、草鞋銭を貰うのだと思つたに違いない。……

「ええ、これは、お客様、お龜末なこととして。」

と紺の鯉口に、おなじ幅広の前掛けした、痩せた、色のやや青黒い、陰気だが律儀らしい、まだ三十六七ぐらいな、五分刈りの男が丁寧に襖際に畏まつた。

「どういたして、……まことに御馳走様。……番頭さんですか。」

「いえ、当家の料理人にございますが、至つて不束ふつつかでございます。……それに、かような山家やまが辺鄙へんびで、一向お口に合いますものもございませんで。」

「とんでもないこと。」

「つきまして、……ただいま、女どもまでおつしやりつけでございましたが、鶴を、貴あなた方さま様、何か鍋でめしあがりたいというお言ことばで、いかようにいたして差し上げましょうや、右、女どももやつぱり田舎いなかものことでございますで、よくお言がのみ込めかねます。ゆえに失礼ではございますが、ちよいとお伺いに出ましてございますが。」

境は少なからず面くらつた。

「そいつはどうも恐縮です。——遠方のところを。」

とうつかり言つた。……

「申しやうだん戲ごのようですが、全く三階まで。」

「どう仕つかまつりまして。」

「まあ、こちらへ——お忙しいんですか。」

「いえ、お膳ぜんは、もう差し上げました。それが、お客様も、貴方様のほか、お二組ぐらい

よりございません。」

「では、まあこちらへ。——さあ、ずっと。」

「はッ、どうも。」

「失礼をするかも知れないが、まあ、一杯ひとつ。ああ、——ちようどお銚子が来た。女中ねえさん、お酌をしてあげて下さい。」

「は、いえ、手前不調法で。」

「まあまあ一杯ひとつ。——弱ったな、どうも、鵜つぐみを鍋なべでと言つて、……その何ですよ。」

「旦那様、帳場でも、あの、そう申しておりますの。鵜は焼いてめしあがるのが一番おいしいんでございますつて。」

「お膳にもつけて差し上げましたが、これを頭から、その脳味のうみ噌そをするりとな、ひと噛かりにめしあがりますが、おいしいんでございまして、ええとんだ田舎流儀ではございますがな。」

「お料理番さん……私は決して、料理をとやこう言うたのではないのですよ。……弱ったな、どうも。実はね、あるその宴会の席で、その席に居た芸げい妓しやが、木曾の鵜の話をしたんです——大分酒が乱れて来て、何とか節ふしというのが、あっちこちではじまると、木曾

節というのがこの時あ頭らわれて、——きいても可な懐づかしい土地だから、うろ覚えに覚えているが、（木曾へ木曾へと積み出す米は）何とかついでというのでね……」

「さようで。」

と真四角に猪口ちよくをおくと、二つ提さげの煙草たばこ入れから、吸いかけた煙管きせるを、金かねの火鉢ひばちだ、遠慮なくコツツンと敲たたいて、

「……（伊那いなや高遠たかとの余り米）……と云うでございます、米、この女中の名でございます、お米よね。」

「あら、何だよ、伊作いさくさん。」

と女中が横にらみに笑つて睨にらんで、

「旦那さん、——この人は、家うちが伊那いなだもんでございますから。」

「はあ、勝かつ頼より様と同国ですな。」

「まあ、勝頼かつより様は、こんな男ぶりじゃありませんが。」

「当り前よ。」

とむツつりした料理番は、苦笑いもせず、またコツツンと煙管はたを払く。

「それだもんですから、伊那いなの鼻ひ屑いをしますの——木曾うたで唄うたうのは違いますが。——（伊

那や高遠へ積み出す米は、みんな木曾路きそじの余り米——と言いますの。」

「さあ……それはどつちにしろ……その木曾へ、木曾へのきつかけに出た話なんですから、私たちも酔つてはいるし、それがあとの贅にえがわ川がわだか、峠を越した先の藪原やぶはら、福島、上あげま松まつのあたりだか、よくは訊きかなかつたけれども、その芸妓げいしやが、客と一所に、鵜うあみを掛けに木曾へ行つたという話をしたんです。……まだ夜の暗よいうちに山道をずんずん上つて、案内者の指揮さしずの場所で、かすみを張つて罟おとりを揚げると、夜明け前、霧のしらじらに、向うの尾上おのえを、ぱつとこちらの山の端はへ渡る鵜の群れが、むらむらと来て、羽ばたきをして、かすみに掛かる。じわじわととつて占めて、すぐに焚火たきびで附け焼きにして、膏あぶらの熱いところを、ちゅツと吸つて食べるんだが、そのおいしいこと、……と言つて、話をしてね……」

「はあ、まつたくで。」

「……ぶるぶる寒いから、煮爛にえかんで、一杯のみながら、息もつかずに、幾口か鵜うを噛かじつて、ああ、おいしいと一息して、焚火にしがみついたのが、すつと立つと、案内についた土地の獵師が二人、きやつと言つた——その何なんですよ、芸妓の口が血だらけになつていたんだとき。生なまなま々とした半熟の小鳥の血です。……とこの話をしながら、うっかりしたよ

うにその芸妓は手巾で口を压えたんですがね……たらたらと赤いやつが沁みそうで、私は顔を見ましたよ。触ると痛いような瘦せぎすな、すらりとした、若い女で。……聞いてもうまそうだが、これは凄かつたろう、その時、東京で想像しても、嶮しいとも、高いとも、深いとも、峰谷の重なり合つた木曾山中のしらしらあけです……暗い裾に焚火を搦めて、すつくりと立ち上がったという、自然、目の下の峰よりも高い処で、霧の中から綺麗な首が。」

「いや、旦那さん。」

「話は拙くつても、何となく不気味だね。その口が血だらけなんだ。」

「いや、いかにも。」

「ああ、よく無事だったな、と私が言うと、どうして? と訊くから、そういうのが、慌てる銃猟家だの、魔のさした猟師に、峰越しの笹原から狙い撃ちに二つ弾丸を食らうんです。……場所と言い……時刻と言い……昔から、夜待ち、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しいことがあると言うが、まったくそれは魔がさしたんだ。だって、靦面に綺麗な鬼になったじゃあないか。……どうせそうよ、……私は鬼よ。——でも人に食われる方の……なぞと言いながら、でも可恐いわね、ぞつとする。と、また口を手巾で压えてい

たのさ。」

「ふーん。」と料理番は、我を忘れて沈んだ声して、

「ええ。旦那、へい、どうも、いや、全く。——実際、危のうございますな。——そういう場合には、きつと怪我があるんでして……よく、その姐さんは御無事でした。この贄川の川上、御嶽口。美濃寄りの峽は、よけいに取れますが、その方の場所はどこでございますか存じません——芸妓衆は東京のどちらの方で。」

「なに、下町の方ですがね。」

「柳橋……」

と言つて、覗くように、じつと見た。

「……あるいはその新橋とか申します……」

「いや、その真中ほどです……日本橋の方だけれど、宴会の席ばかりでの話ですよ。」

「お処が分かつて差支えがございませんければ、参考のために、その場所を伺っておきたいくらいでございます。……この、深山幽谷のことは、人間の智慧には及びません——」

女中も俯向いて暗い顔した。

境は、この場合誰だれもしよう、乗り出しながら、

「何か、この辺に変わったことでも。」

「……別にその、と云ってごさいません。しかし、流れに瀬がごさいますように、山にも淵ふちがごさいますで、気をつけなければなりません。——ただいまさしあげました鶴つぐみは、これは、つい一兩日続きまして、珍しく上の峠とうげ口で獵があつたのでごさいます。」

「さあ、それなんですよ。」

境はあらためて猪口ちよくをうけつつ、

「料理番さん。きみのお手際てぎわで膳ぜんにつけておくんなすつたのが、見てもうまそうに、香かしく、脂あぶらの垂れそうなので、ふと思ひ出したのは、今の芸妓げいしやの口が血の一件でね。しかし私は坊さんでも、精進でも、何でもありません。望んでも結構なだけけれど、見たまえ。

——窓の外は雨と、もみじで、霧が山を織っている。峰の中には、雪を頂いて、雲を貫いて聳そびえたのが見えるんです。——どんな拍子かで、ひよいと立ちでもした時口が血になつて首が上へ出ると……野郎でこの面つらだから、その芸妓のような、凄すじく美しく、山の神かみの化身しんのように見えまいがね。落ち残つた柿かきだと思つて、窓の外から鳥からすが突つかないとも限らない、……ふと変な気がしたものだから。」

「お米さん——電燈がなぜか、遅いでないか。」

料理番が沈んだ声で言った。

時雨は晴れつつ、木曾の山々に暮が迫った。奈良井川の瀬が響く。

二

「何だい、どうしたんです。」

「ああ、旦那。」と暗夜の庭の雪の中で。

「鷺が来て、魚を狙うんでございます。」

すぐ窓の外、間近だが、池の水を渡るような料理番——その伊作の音がする。

「人間が落ちたか、獺でも駈け廻るのかと思つた、えらい音で驚いたよ。」

これは、その翌日の晩、おなじ旅店の、下座敷のことであつた。……

境は奈良井宿に逗留した。ここに積もつた雪が、朝から降り出したためではない。

別にこのあたりを見物するためでもなかつた。……昨夜は、あれから——鷓を鍋でと誂え

たのは、しゃも、かしわをするように、膳ぜんのわきで火鉢ひばちへ掛けて煮るだけのこと、と言つたのを、料理番が心得て、そのぶつ切りを、皿に山もり。目筈めざる一杯、葱ねぎのぎくぎくを添えて、醬油しょうゆも砂糖も、むきだしに担かつぎあげた。お米が烈々と炭を継ぐ。

越こしの方だが、境の故郷いまわりでは、季節になると、この鵜うを珍重すること一通りでない。料理屋が鵜御料理おんりょうり、じぶ、おこのみなどという立看板を軒に掲げる。鵜うどん、鵜蕎麦そばと蕎麦屋までが貼紙びらを張る。ただし安価やすくない。何の椀わん、どの鉢はちに使つても、おん羹あつもの、おん小蓋こぶたの見識で。ぽつちり三鬘みきれ、五鬘いつきれよりは附けないのに、葱ひとつと一所ひとつに打ち覆まけて、鍋なべからもりこぼれるような湯気を、天井へ立てたは嬉うれしい。

あまつさえ熱爛あつかんで、熊くまの皮に胡坐あぐらで居た。

芸妓げいしやの化けものが、山賊にかわつたのである。

寝る時には、厚あつ衾ふすまに、この熊くまの皮が上へ被かぶさつて、袖そでを包み、蔽おほい、裙すそを包んだのも面白い。あくる日、雪になろうとてか、夜嵐よあらしの、じんと身に浸しむのも、木曾川の瀬の凄すしいのも、ものの数ともせず、酒の血と、獣の皮とで、ほかほかして三階にぐつすり寝込んだ。

次第であるから、朝は朝飯から、ふつつつと吹いて啜すするような豆腐の汁しるも気に入った。

一昨日いつさくじつの旅館の朝はどうだろう。……溝どぶの上澄みのような冷たい汁に、おん羹かきほどに蜷しじみが泳いで、生煮えの臭きとといったらなかつた。……

山も、空も氷を透とおすごとく澄みきつて、松の葉、枯木の閃きらめくばかり、晁きらきら々と陽ひがさしつ、それで、ちらちらと白いものが飛んで、奥山に、熊くまが人立じんりつして、針を噴ふくような雪であつた。

朝飯あさが済んでしばらくすると、境はしくしくと腹はらが疼いたみだした。——しばらくして、二度はばかりへ通つた。

あの、餛飩うどんの祟たたりである。鵜うを過食したためでは断じてない。二ぜん分を籠こみにした生がえりのうどん粉あたの中あた毒あらない法はない。お腹なかを圧おさえて、餛飩を思うと、思う下からチクチクと筋が動いて痛み出す。——もつとも、戸外そとは日当りに針が飛んでいようが、少々腹が痛もうが、我慢して、汽車に乗れないという容よう体たいではなかつたので。……ただ、誰も知らない。この宿の居心のいいのにつけて、どこかへのつらあてにと、逗とまり留りゆうする気になつたのである。

ところで座敷だが——その二度めだつたか、廁かわやのかえりに、わが座敷へ入ろうとして、三階の欄干てすりから、ふと二階を覗のぞくと、階はしこ子段だんの下に、開けた障子に、箒ほうきとはたきを立て

掛けた、中の小座敷に炬燵があつて、床の間が見通される。……床に行李と二つばかり重ねた、あせた萌葱の風呂敷づつみの、真田紐で中結わえをしたのがあつて、旅商人と見える中年の男が、ずつぷり床を背負つて当たつていと、向い合いに、一人の、中年増の女中がちよいと浮腰で、膝をついて、手さきだけ炬燵に入れて、少し仰向くようにして、旅商人と話をしている。

なつかしい浮世の状を、山の崖から掘り出して、旅宿に嵌めたように見えた。座敷は熊の皮である。境は、ふと奥山へ棄てられたように、里心が着いた。

一昨日松本で城を見て、天守に上つて、その五層めの朝霜の高層に立つて、ぞつとしたような、雲に連なる、山々のひしと再び窓に来て、身に迫るのを覚えもした。バスケットに、等閑に絡めたままの、城あとの崩れ堀の苔むす石垣を這つて枯れ残つた小さな蔦の紅の、鶯の血のしたたるごときを見るにつけても。……急に寂しい。——「お米さん、下階に座敷はあるまいか。——炬燵に入つてぐつすりと寝たいんだ。」

二階の部屋々々は、時ならず商人衆の出入りがあるからと、望むところの下座敷、おも屋から、土間を長々と板を渡つて離れ座敷のような十畳へ導かれたのであつた。

肱掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。

白雪の飛ぶ中に、緋鯉ひいの背、真鯉まの鱭ひれの紫は美しい。梅も松もあしらったが、大方は樫かしのしげの大木である。朴ほの樹きの二抱かかえばかりなのさえすつくと立つ。が、いずれも葉を振るつて、素裸すだの山神さんじんのごとき装まいだつたことは言うまでもない。

午後三時ごろであつたろう。枝こに梢すえに、雪の咲くのを、炬燵はすかで斜す違かいに、くの字になつて——いい婦おんなだとお目に掛かけたい。

肱掛窓ひまかを覗のぞくと、池の向うの椿つばきの下に料理番が立つて、つくねんと腕組して、じつと水を瞻みまもるのが見えた。例の紺つの筒袖つツッほに、尻しりからすぽんと巻いた前垂まえだれで、雪の凌しのぎに鳥打帽とりうちぼうを被かぶつたのは、いやしくも料理番が水中の鯉を覗くとは見えない。大きな鵜うが沼どじょうの鱒ますを狙ねらっている形である。山も峰も、雲深くその空を取り囲む。

境は山間の旅情を解した。「料理番さん、晩の御馳走ごちそうに、その鯉を切るのかね。」「へへ。」と薄暗い顔を上げてニヤリと笑いながら、鳥打帽を取つてお時儀をして、また被り直すと、そのままごそごそと樹きを潜くぐつて廂ひさしに隠れる。

帳場は遠し、あとは雪がやや繁しげくなつた。

同時に、さらさらさらさらと水の音が響いて聞こえる。「——また誰か洗面所の口金を開け放したな。」これがまた二度めで。……今朝三階の座敷を、ここへ取り替えない前に、

ちと遠いが、手水を取るのに清潔だからと女中が案内をするから、この離座敷に近い洗面所に来ると、三力所、水道口があるのにそのどれを捻つても水が出ない。さほどの寒さとは思えないが凍てたのかと思つて、裾のように高く手を鳴らして女中に言う、「あれ、汲み込みます。」と駈け出して行くと、やがて、スツと水が出た。——座敷を取り替えたあとで、はばかりに行くと、ほかに手水鉢がないから、洗面所の一つを捻つたが、その時はほんのたらたらと滴つて、辛うじて用が足りた。

しばらくすると、しきりに洗面所の方で水音がする。炬燵から潜り出て、土間へ下りて橋がかりからそこを覗くと、三ツの水道口、残らず三条の水が一齊にぎつと灌いで、徒らに流れていた。たしない水らしいのに、と一つ一つ、丁寧に始めて座敷へ戻つた。が、その時も料理番が池のへりの、同じ処につくねんとイんでいたのである。くどいようだが、料理番の池に立ったのは、これで二度めだ。……朝のは十時ごろであつたらう。トその時料理番が引つ込むと、やがて洗面所の水が、再び高く響いた。

またしても三条の水道が、残らず開放しに流れている。おなじこと、たしない水である。あとで手を洗おうとする時は、きつと涸れるのだからと、またしても口金をしめておいたが。——

いま、午後の三時ごろ、この時も、さらにその水の音が聞こえ出したのである。庭の外には小川も流れる。奈良井川の瀬も響く。木曾へ来て、水の音を気にするのは、船に乗って波を見まいとするようなものである。望みこそすれ、嫌いも避けもしないのだけれど、不思議に洗面所の開け放しばかり気になった。

境はまた廊下へ出た。果して、三条とも揃って——しよろしよると流れている。「旦那さん、お風呂ですか。」手拭を持っていたのを見て、ここへ火を直しに、台十能を持つて来かかった、お米が声を掛けた。「いや——しかし、もう入れるかい。」「じきでございます。……今日はこの新館のが湧きますから。」なるほど、雪の降りしきるなかに、ほんのりと湯の香が通う。洗面所の傍の西洋扉が湯殿らしい。この窓からも見える。新しく建て増した柱立てのまま、筵がこいにしたのもあり、足場を組んだ処があり、材木を積んだ納屋もある。が、荒れた厩のようになって、落葉に埋もれた、一帯、脇本陣とでも言いそうな旧家が、いつか世が成金と言った時代の景気につれて、桑も蚕も当たったであろう、このあたりも火の燃えるような勢いに乗じて、贅川はその昔は、煮え川にして、温泉の湧いた処だなぞと、ここが温泉にでもなりそうな意気込みで、新館建増しかかったのを、この一座敷と、湯殿ばかりで、そのまま沙汰やみになったことなど、あとで

分かつた。「女中さんかい、その水を流すのは。」閉めたばかりの水道の栓を、女中が立ちながら一つずつ開けるのを視て、たまらず詰るように言つたが、ついでにこの仔細も分かつた。……池は、樹の根に樋を伏せて裏の川から引くのだが、一年に一二度ずつ水涸れがあつて、池の水が干ようとす。鯉も鮒も、一処へ固まつて、泡を立てて弱るので、台所の大桶へ汲み込んだ井戸の水を、はるばるとこの洗面所へ送つて、橋がかりの下を潜らして、池へ流し込むのださうであつた。

木曾道中の新版を二三種ばかり、枕もとに散らした炬燵へ、ずぶずぶと潜つて、「お米さん、……折り入つて、お前さんに頼みがある。」と言いかけて、初々しくちよつと俯向くのを見ると、猛然として、喜多八を思い起こして、わが境は一人で笑つた。「ははは、心配なことではないよ。——おかげで腹あんばいも至つてよくなつたし、……午飯を抜いたから、晩には入り合せにかつ食い、大いに飲むとするんだが、いまね、伊作さんが渋苦い顔をして池を覗んで行きました。どうも、鯉のふとり工合を鑑定したものらしい……きつと今晚の御馳走だと思ふんだ。——昨夜の鵜じやないけれど、どうも縁あつて池の前に越して来て、鯉と隣付き合ひになつてみると、目の前から引き上げられて、俎で輪切りは酷い。……板前の都合もあろうし、またわがままを言うのではない。……

活いづくりはお断わりだが、実は鯉こい汁大歓迎なんだ。しかし、魚屋か、何か、都合して、ほかの鯉を使つてもらうわけには行くまいか。——差し出たことだが、一尾びきか二尾びきで足りるものなら、お客は幾人だか、今夜の入いり用ようだけは私がその原料を買つてもいいから。」女中の返事が、「いえ、この池のは、いつもお料理にはつかいませんのでございます。うちの旦那も、おかみさんも、お志の仏の日には、鮎あひだの、鯉こいだの、……この池へ放しなされるんでございます。料理番さんもやつぱり。……そして料理番あひは、この池のを大事にして、可愛かわいがつて、そのせいですか、隙ひまさえあれば、黙つてああやつて庭へ出て、池を覗いてますんです。」「それはお詛あつちえだ。ありがたい。」境は礼を言つたくらいであつた。

雪の頂から星が一つ下がつたように、入いり相あいの座敷に電燈の点ついた時、女中が風呂を知らせに來た。

「すぐに膳ぜんを。」と声を掛けておいて、待ち構えた湯どのへ、一散——例の洗面所の向うの扉とを開けると、上がり場らしいが、ハテ真暗である。いやいや、提ちよう灯ちんが一燈ぼうと薄白く点ついている。そこにもう一枚扉ひらきがあつて閉まつていた。その裡なかが湯どのらしい。

「半はん作さく事じだと言うから、まだ電燈でんきが点かないのだろう。おお、二ふたつ巴どもえの紋えだな。大星おほほしだか由良ゆら之助のすけだから、鼻はなを衝つく、鬱うつ陶とうしい巴どもえの紋えも、ここへ來ると、木曾殿きちょうの寵あい愛を

思い出させるから奥床しい。」

と帯を解きかけると、ちやぶり——という——人が居て湯を使う氣勢けはいがする。この時、洗面所の水の音がハタとやんだ。

境はためらった。

が、いつでもかまわぬ。……他ひとが済んで、湯のあいた時を知らせてもらいたいと言っておいたのである。誰も入ってはいまい。とにかくと、解きかけた帯を挟はさんで、ずツと寄つて、その提灯の上から、扉とにひつたりと頬ほおをつけて伺うと、袖そでのあたりに、すうーと暗くなる、蠟燭ろうそくが、またぼうと明あかくなる。影かげが痣あざになつて、巴かたほが一つ片頬かたほに映るように陰気に沁しみ込む、と思うと、ばちやり……内端うちわに湯が動いた。何の隙間すきまからか、ぷんと梅の香を、ぬくもりで溶かしたような白粉おしろいの香がする。

「婦人おんなだ」

何しろ、この明りでは、男客にしろ、一所に入ると、暗くて肩も手も跨またぎかねまい。乳ぶつに打着ぶつかりかねまい。で、ばたばたと草履ぞうりを突つ掛けたまま引き返した。

「もう、お上あがりがりになりました？」と言う。

通とほいが遠い。ここで爛かんをするつもりで、お米がさきへ銚ちょうし子しだけ持って来ていたのであ

る。

「いや、あとにする。」

「まあ、そんなにお腹なかがすいたんですの。」

「腹もすいたが、誰かお客が入っているから。」

「へい、……こっちの湯どのは、久しく使わなかったのですが、あの、そう言つては悪う
ございますけど、しばらくぶりで、お掃除そうじかたがた旦だんなさま那様に立てましたのでございます
から、……あとで頂きますまでも、……あの、まだどなたも。」

「かまやしない。私はゆつくりでいいんだが、婦人の客のようだったぜ。」

「へい。」

と、おかしなベソをかけた顔を見ると、手に持つ銚子が湯沸しにカチカチカチと震えた
つけ、あとじさりあとしさりに、ふいと立つて、廊下に出た。一度ひっそりあしおと音を消すや否や、け
たたましい音を、すたんと立てて、土間の板をはたはたと鳴らして駈かけ出した。

境はきよんととして、

「何だい、あれは……」

やがて膳ぜんを持って頭あわられたのが……お米でない、年増としまのに替わっていた。

「やあ、中二階のおかみさん。」

「商人と、炬燵こたつで睦むつまじかったのはこれである。

「御亭主ごていしゆはどうしたい。」

「知りませんよ。」

「ぜひ、承りたいんだがね。」

半ば串戯じょうだんに、ぐツと声を低くして、

「出るのかい……何か……あの、湯殿へ……まったく？」

「それがね、旦那、大笑いなんでございますよ。……どなたもいらっしやらないと思って、申し上げましたのに、御婦人の方が入っておいでだって、旦那がおっしゃったと言うので、米ちゃん、大変な臆病おくびょうなんですから。……久しくつかいません湯殿ですから、内のお上さんが、念のために、——」

「ああそうか、……私はまた、ちよつと出るのかと思つたよ。」

「大丈夫、湯どのへは出ませんけれど、そのかわりお座敷へはこんなのが、ね、貴方あなた。」

「いや、結構。」

お酌しやくはこの方が、けつく飲める。

夜は長い、雪はしんしんと降り出した。床を取ってから、酒をもう一度、その勢いでぐつすり寝よう。晩飯ばんはいい加減で膳を下げた。

登音が入り乱れる。ばたばたと廊下へ続くと、洗面所の方へ落ち合ったらしい。ちよろちよろと水の音がまた響き出した。男の声も交じって聞こえる。それが止むやと、お米ふすまが襖から円まるい顔を出して、

「どうぞ、お風呂へ。」

「大丈夫か。」

「ほほほほ。」

とちとてれたように笑うと、身を廊下へ引くのに、押し続いて境は手拭てぬぐいを提さげて出た。橋がかりの下り口に、昨夜帳場に居た坊主頭の番頭と、女中頭がしうか、それとも女房かと思う老けた婦おんなと、もう一人の女中とが、といった形に顔を並べて、一団ひとかたまりになってこなたを見た。そこへお米の姿が、足袋たびまで見えてちよちよこと橋がかりを越えて渡ると、三人の懐ふところへ飛び込むように一団ひとかたまり。

「御苦労様。」

わがために、見とどけ役のこの人数で、風呂しらを検べたのだと思うから声を掛けると、一

度に揃そろつてお時儀をして、屋根が萱かやぶきの長土間に敷いた、そのあゆみ板を渡つて行く。土間のなかばで、そのおじやのかたまりのような四人の形が暗くなったのは、トタンに、一つ二つ電燈がスツと息を引くように赤くなつて、橋がかりのも洗面所のも一齊いっせいにパツと消えたのである。

と胸を吐つくと、さらさらさらさらと三筋に……こう順に流れて、洗面所を打つ水の下に、さつきの提ちようちん灯が朦朧もろうつと、半ば暗く、巴ともえを一つ照らして、墨でかいた炎か、鯰なますの跳ねたか、と思う形に点ともれていた。

いまにも電燈が点つくだろう。湯殿口へ、これを持って入る気で、境がごみざまに手を掛けようとすると、提灯がフツと消えて見えなくなつた。

消えたのではない。やっぱりこれが以前のごとく、湯殿の戸口に点いていた。これはおのずから雫しずくして、下の板敷の濡ぬれたのに、目の加減で、向うから影が映さじたものであろう。はじめから、提灯がここにあつた次第わけではない。境は、斜めに影の宿つた水中の月を手にとろうとしたと同じである。

爪つまさぐりに、例の上がり場へ……で、念のために戸口に寄ると、息が絶えそうに寂ひっそり寞しながら、ばちやんと音がした。ぞつと寒い。湯気が天井から雫しずくになつて点したた滴るのではな

しに、屋根の雪が溶けて落ちるような氣勢けはいである。

ぼちゃん、……ちやぶりと微かすかに湯が動く。とまた得ならず艶えんな、しかし冷たい、そして、におやかな、霧に白粉おしろいを包んだような、人膚ひとはだの気がすつと肩に絡まつわって、頸うなじを撫なでた。

脱えもんぐはずの衣紋えもんをかつしめて、

「お米さんか。」

「いいえ。」

と一呼吸間ひといきまを置いて、湯どこの裡なかから聞こえたのは、もちろんわが心がわが耳に響いたのであろう。——お米でないの言うまでもなかったのである。

洗面所の水の音がびつたりやんだ。

思わず立ち竦すくんで四辺あたりを見た。思い切つて、

「入りますよ、御免。」

「いけません。」

と澄みつつ、湯気に濡ぬれ濡ぬれとした声が、はつきり聞こえた。

「勝手にしろ！」

我を忘れて言つた時は、もう座敷へ引き返していた。

電燈は明るかつた。巴の提灯はこの光に消された。が、水は三筋、さらにさらさらと走つていた。

「馬鹿にしやがる。」

不気味より、凄^{すじ}いより、なぶられたような、反感が起こつて、炬燵^{こたつ}へ仰向けにひっくり返つた。

しばらくして、境が、飛び上がるように起き直つたのは、すぐ窓の外に、ざぶり、ばちやばちやばちや、ばちや、ちやつと、けたたましく池の水の掻^か攪^{みた}さるる音を聞いたからであつた。

「何だろう。」

ばちやばちやばちや、ちやつ。

そこへ、ごそごそと池を廻つて響いて来た。人の来るのは、なぜか料理番だろうと思つたのは、この池の魚^{うお}を愛惜すると、聞いて知つたためである。……

「何だい、どうしたんです。」

雨戸を開けて、一面の雪の色のやや薄い処ところに声を掛けた。その池も白いまで水は少ないのであった。

三

「どつちです、白鷺しろいさぎかね、五位鷺ごいさぎかね。」

「ええ——どつちもでございますな。両方だろうと思うんですが。」

料理番の伊作は来て、窓下の戸際とぎわに、がツしり腕組をして、うしろ向きに立って言った。

「むこうの山口の大林から下りて来るんでございます。」

ことば 言の中にも顕あらわれる、雪の降りやんだ、その雲の一方は漆うるしのごとく森が黒い。

「不断のことではありませんが、……この、旦那だんな、池の水の涵かれるところを狙ねらうんでございます。鯉こいも鮒ふなも半分鱗ひれを出して、あがきがつかないのでございますから。」

「伶俐りこうな奴やつだね。」

「馬鹿な人間は困つちまいます——魚うおが可哀相かわいそうでございますので……そうかと言って、

夜一夜、立番をしてもおられません。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御註文の時刻でございますから、何か、不手際なものでも見繕つて差し上げます。」

「都合がいたら、君が来て一杯、ゆつくりつき合つてくれないか。——私は夜ふかしは平気だから。一所に……ここで飲んでいたら、いくらか案山子になるだろう。……」

「——結構でございます。……もう台所は片附きました、追ツつけ伺います。——いたずらな餓鬼どもめ。」

と、あとを口ごごとで、空を睨みながら、杖をざらざらと潜つて行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかつた。もちろん、ごく細目には引いたが。——実は、雪の池のここへ来て幾羽の鷺の、魚を狩る状を、さながら、炬燵で見のお伽話の絵のように思つたのである。すわと言え、追いつるとも、驚かすとも、その場合のこととして……第一、気もそぞろなことは、二度まで湯殿の湯の音は、いずれの間隙からか雪とともに、鷺が起ち込んで浴みしたろう、とそうさえ思つたほどであつた。

そのままじつと覗いてみると、薄黒く、ごそごそと雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふわりと巴の提灯が点いて行く。おお今、窓下では提灯を持つてはいなかつたようだ。——

—それに、もうやがて、庭を横ぎつて、濡縁か、戸口に入りそうだと、思うまで距たつた。遠いまで小さく見える、としばらくして、ふとあとへ戻るような、やや大きくなつて、あの土間廊下の外の、萱屋根のつま下をすれずれに、だんだんこなたへ引き返す、引き返すのが、気のせいだか、いつの間にか、中へはいつて、土間の暗がりを点れて来る。……橋がかり、一方が洗面所、突当りが湯殿……ハテナときよつとするまで気がついたのは、その点れて来る提灯を、座敷へ振り返らずに、逆に窓から庭の方に乗り出しつつ見ていることであつた。

トタンに消えた。——頭からゾツとして、首筋を硬く振り向くと、座敷に、白鷺かと思う女の後ろ姿の頸脚がスツと白い。

違い棚の傍に、十畳のその辰巳に据えた、姿見に向かつた、うしろ姿である。……湯気に山茶花の悄れたかと思う、濡れたように、しっとりとし身についた藍鼠の縞小紋に、朱鷺色と白のいち松のくつきりした伊達巻で乳の下の縊れるばかり、消えそうな弱腰に、裾模様様が軽く靡いて、片膝をやや浮かした、棲を友染がほんのり溢れる。露の垂りそうな円鬚に、桔梗色の手絡が青白い。浅葱の長襦袢の裏が媚かしく搦んだ白い手で、刷毛を優しく使いながら、姿見を少しごみなりに覗くようにして、化粧をしていた。

境は起つも坐るも知らず息を詰めたのである。

あわれ、着た衣は雪の下なる薄もみじで、膚の雪が、かえって薄もみじを包んだかと思
う、深く脱いだ襟脚を、すらりと引いて掻き合わすと、ぼつとりとして膝近だった懐紙
を取つて、くるくると丸げて、掌を拭いて落とししたのが、畳へ白粉のこぼれるようであ
つた。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできいた人膚に紛うとめきが薰つて、少し斜めに
居返ると、煙草を含んだ。吸い口が白く、艶々と煙管が黒い。

トーンと、灰吹の音が響いた。

きつと向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通つて、色の白さは凄
いよう。——気の籠もつた優しい眉の両方を、懐紙でひたと隠して、大きな瞳でじつと視
て、

「……似合いますか。」

と、莞爾した齒が黒い。と、莞爾しながら、棲を合わせぎまにすつくりと立った。顔
が鴨居に、すらすらと丈が伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上がった。ふわりと、その婦の袖で抱き上げら

れたと思つたのは、そうでない、横に口に引き銜えられて、畳を空に釣り上げられたのである。

山が真黒になつた。いや、庭が白いと、目に遮つた時は、スツと窓を出たので、手足はいつか、尾鰭おひれになり、我はぴちぴちと跳ねて、婦おんなの姿は廂ひさしを横に、ふわふわと欄間の天人のように見えた。

白い森も、白い家も、目の下に、たちまちさつと……空高く、松本城の天守をすれすれに飛んだように思うと、水の音がして、もんどり打つて池の中へ落ちると、同時に炬燵こたつでハツと我に返つた。

池におびただしい羽音が聞こえた。

この案山子かかしになど追えるものか。

バスケットの、鶯つたの血を見るにつけても、青い呼吸いきをついてぐったりした。

廊下へ、しとしとと人の音がする。ハツと息を引いて立つと、料理番が膳ぜんに銚子ちょうしを添えて来た。

「やあ、伊作さん。」

「おお、旦那だんな。」

四

「昨年のちようど今ごろでございました。」

料理番はひしと、身を寄せ、肩をしめて話し出した。

「今年は今朝から雪になりましたが、そのみぎりは、忘れもしません、前日雪が降りました。積もり方は、もつと多かったのでございます。——二時ごろに、目の覚めますような御婦人客が、ただお一方ひとかたで、おいでになつたのでございます。——目の覚めるようだと申しまして派手ではありません。婀娜あだな中に、何となく寂しさのございます、二十六七のお年ごろで、高等な円鬚まるまげでおいででございました。——御容ごようす子のいい、背のすらりとした、見立ての申し分のない、しかし奥様と申すには、どこか媚めかしさが過ぎております。そこは、田舎いなかものでも、大勢お客様をお見かけ申しておりますから、じきにくろうと衆しゆだと存じましたのでございまして、これが柳橋の蓑みの吉きちさんという姐ねえさんだったことが、後に分かりました。宿帳の方はお艶つやさま様でございます。

その御婦人を、旦那——帳場で、このお座敷へ御案内申したのでございます。

風呂が大好きで……もちろん、お嫌な方もたんとごきますまいが、あの湯へ二度、お着きになって、すぐと、それに夜分に一度、お入りなすつたのでごきます——都合で、新館の建出しは見合わせておりますが、温泉ごのみに石で畳みました風呂は、自慢でございまして、旧の二階三階のお客様にも、ちと遠うごきますけれども、お入りを願つておりましたところが——実はその、時々、不思議なことがありますので、このお座敷も同様にしばらく使わずにおきましたのを、旦那のような方に試みていただければ、おのずと変なこともなくなりましよう、相談をいたしまして、申すもいかがでございしますが、今日久しぶり、湧かしも使いもいたしましたような次第なのでごきます。

ところで、お艶様、その御婦人でございますが、日のうち一風呂お浴びになりますと、(鎮守様のお宮は、)と聞いて、お参詣なさいました。贅川街道よりの丘の上にごございます。——山王様のお社で、むかし人身御供があがったなどと申し伝えてございます。森々と、もの寂しいお社で。……村社はほかにもございますが、鎮守と言う、お尋ねにつけて、その儀を帳場で申しますと……道を尋ねて、そこでお一人でおのぼりなさいました。目を少々お煩いのように、雪がきらきらして疼むからと言って、こんな土地でございまず、ほんの出来あいの黒い目金を買わせて、掛けて、洋傘を杖のようにしてお出掛けで。

——これは鎮守様へ参詣は、奈良井宿一統への礼儀挨拶というお心だったようでございます。

無事に、まずお帰りなすつて、夕飯の時、お膳で一口あがりました。——旦那の前でございですが、板前へと、御丁寧にお心づけを下すつたものでございますから私……ちよいと御挨拶に出ました時、こういうおたずねでございます——お社へお供物にきざ柿と楊枝とを買いました、……石段下のその小店のお媪さんの話ですが、山王様の奥が深い森で、その奥に桔梗ヶ原きぎょうがはらという、原の中に、桔梗の池というのがあって、その池に、お一方、美しい奥様がいらつしやると言うことですが、ほんとうですか。——

——まったくでございます、と皆まで承わらないで、私が申したのでございます。

論より証拠、申して、よいか、悪いか存じませんが、現に私が一度見ましたのでございます。

「……………」

「桔梗ヶ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗に咲きます、けれども、桔梗ばかりというのではございません。ただその大池の水が真桔梗の青い色でございます。桔梗はかえつて、白い花のが見事に咲きますのでございまして。……」

四年あとになります、正午まひるというのに、この峠向うの藪原宿やぶはらしゆくから火が出ました。正午しょうごまの刻こくの火事は大きくなると、何国いすこでも申しませんが、全く大焼けでございました。山王様の丘へ上がりますと、一目に見えます。火の手は、七条ななすじにも上がりまして、ぱちぱちばんばんと燃える音が手に取るように聞こえます。……あれは山間やまあいの滝か、いや、ぼんぶの水の走るのだと申すくらい。この大南風おおみなみの勢いでは、山火事になって、やがて、ここもとまで押し寄せはしまいかと案じますほどの激しきで、駈かけつけるものは駈かけつけません、騒ぐものは騒てまいぐ。私てまいなぞは見物の方で、お社前やしろうは、おなじ夥間なかもで充満いっぱいでございました。

二百十日の荒れ前で、残暑の激しい時でございましたから、ついつい少しずつお社の森の中へ火を見ながら入りましたにつけて、不断は、しつかり行くまじきとしてある処ところではございませんが、この火の陽気で、人の気の湧わいている場所から、深いといっても半町とはなない。大丈夫と。ところで、私陰てまい気もので、あまり若衆わかしゆづきあいがございますから、誰を誘うでもあるまいと、杉すぎ檜ひのきの森々としました中を、それも、思ったほど奥が深くもございませんで、一面の草花。……白い桔梗ききょうでへりを取った百畳敷まつさおばかりの真青まっさおな池が、と見ますと、その汀みぎわ、ものの二……三……十間とはない処に……お一人、何ともお

うつくしい御婦人が、鏡台を置いて、斜めに向かつて、お化粧をなさっていらつしやいました。

お髪かみがどうやら、お召ものが何やら、一目見ました、その時の凄すごさ、可恐おそろしさと言つてはございません。ただいま思い出しても御酒ごしゆが氷こになつて胸むねへ沁しみます。ぞつとします。……それでいてそのお美しさが忘れられません。勿もつ体たいないようでございますけれど、家のないもののお仏壇に、うつしたお姿と存じまして、一日でも、この池の水を視ながめまして、その面影おもかげを思わずにはおられませんのでございます。——さあ、その時は、前後も存ぞんぜず、翼はねの折れた鳥が、ただ空から落ちるような思いで、森を飛び抜けて、一目散に、高い石段を駈かけ下りました。私てまいがその顔の色と、怯おびえた様子とはなかつたそうでございますましてな。……お社前の火事見物が、一雪崩ひとなだれになつて遁にげ下おりました。森の奥から火を消すばかり冷たい風で、大蛇だいじやがさつと追つたようで、遁てまいげた私は、野兎のうさぎの飛んで落ちるように見えたということでございます。

とこの趣を——お艶様、その御婦人に申しますと、——そうしたお方を、どうして、女おんな神かみ様さまとも、お姫様とも言わないで、奥さまと言うんでしよう。さ、それでございます。私てまいはただ目が暗くんでしまいました、前ぜん々ぜんより、ふとお見上げ申したものの言うのでは、

桔梗の池のお姿は、眉まゆをおとしていらつしやりまするそう度……」

境はゾツとしながら、かえつて炬燵こたつを傍わきへ払つた。

「どなたの奥方とも存ぜずに、いつとなくそう申すのでございまして……旦那。——お艶様に申しますと、じつとお聞きなすつて——だと、その奥さまのお姿は、ほかにも見た方がありますか、とおつしやいます——ええ、月の山の端は、花の麓路ふもとじ、螢ほたるの影、時雨しぐれの提ち灯ようちん、雪の川かわべりなど、随分村方でも、ちらりと拝んだものはございます。——お艶様はこれをきいて、猪口ちよくを下したに置いて、なぜか、しよんぼりとおうつむきなさいました。——

——とところで旦那……その御婦人が、わざわざ木曾のこの山家やまがへ一人旅をなされた、用事がでございまする。」

五

「ええ、その時、この、村方で、不思議千万な、色出入り、——変な姦通まおとこ事件がござい
ました。」

村入りの雁股と申す処に（代官婆）という、庄屋のお婆さんと言えば、まだしおらしく聞こえますが、代官婆。……渾名で分かりますくらいおそろしく権柄な、家の系図を鼻に掛けて、俺が家はむかし代官だぞよ、と二言めには、たつみ上がりになりますので。その了簡でございますから、中年から後家になりながら、手一つで、まず……俵どのを立派に育てて、これを東京で学士先生にまで仕立てました。……そこで一頃は東京住居をしておりましたが、何でも一旦微禄した家を、故郷に打っ開けて、村中の面を見返すと申して、估券潰れの古家を買ひまして、両三年前から、その俵の学士先生の嫁御、近頃で申す若夫人と、二人で引き籠もっておりますが。……菜大根、茄子などは料理に醬油が費え、だという儉約で、葱、韭、大蒜、辣薤と申す五藎の類を、空地中に、植え込んで、塩で弁するのでございまして。……もう遠くからぱんと、その家が臭います。大蒜屋敷の代官婆。……

ところが若夫人、嫁御というのが、福島商家の娘さんで学校をでた方だが、当世に似合わないおとなしい優しい、ちと内輪すぎますぐらい。もつともこれでなくっては代官婆と二人住居はできません。……大蒜ばなれのした方で、鋤にも、鋏にも、連尺にも、婆どのに追い使われて、いたわしいほどよく辛抱なさいます。

霜月の半ば過ぎに、不意に東京から大森屋敷へお客人がございました。学士先生のお友だちで、この方はどこへも勤めてはいなさらない、もつとも画師えかきだそうでございますから、きまつた勤めとてはございますまい。学士先生の方は、東京のある中学校でれつきとした校長さんでございますが。――

で、その画師さんが、不意に、大森屋敷に飛び込んで参ったのは、ろくに旅費も持たずに、東京から遁にげ出して来たのだそうで。……と申しますのは――早い話が、細君がありながら、よそに深い馴染なじみが出来ました。……それがために、首尾も義理も世の中は、さんざんで、思い余つて細君が意見をなすつたのを、何を！ と言つて、一つ横よこぞつぽ頬くわを撲くわしたはいいが、御先祖、お両親ふたおやの位牌いはいにも、くらわされてしかるべきは自分の方で、仏壇のあるわが家には居たたまらないために、その場から門かどを駈かけ出したは出たとして、知ちかづき合あひにも友だちにも、女房に意見をされるほどの始末で見れば、行き処どころがなかつたので、一夜ひとよしのぎに、この木曾谷まで遁にげ込んだのだそうでございます、遁にげましたなあ。……それに、その細君というのが、はじめ画師えかきさんには恋人で、晴れて夫婦になるのには、この学士先生が大層なお骨折りで、そのおかげで思いが叶かなつたと申したようなわけだそうで。……遁にげ込み場所には屈くつきょう竟ななのでございました。

時に、弱りものの画師さんの、その深い馴染というのが、もし、何と……お艶様——手前どもへ一人でお泊まりになったその御婦人などでございます。……ちよいと申し上げておきますが、これは画師さんのあとをたずねて、雪を分けておいでになったものではございません。その間がぎつと半月ばかりございました。その間に、ただいま申しました、姦まわと通騒こぎが起こつたのでございます。」

と料理番は一息した。

「そこで……また代官ばい婆ばに変な癖ねづかがございましてな。癖より病で——あるもの知りの方に承こりましたのでは、訴訟狂とか申すんだそうで、葱ねぶかが枯かれたと言っては村役場だ、小児こどもが睨にらんだと言いえば交番だ。……派出所だ裁判だと、何でも上沙汰かみぎたにさえ持ち出せば、我に理がある、それ貴客あなた、代官婆あなただけに思い込んでおりますのでございます。

その、大蒜にんにく屋敷の雁股かりまたへ掛かかります、この街道かいどう、棒鼻ぼうばなの辻つじに、巖穴いわあなのような窪地くぼちに引ひつ込んで、石松という獵師がきが、小児こどもだくさんで籠こもっております。四十親仁おやじで、これの小僧びろうくの時ときは、まだ微禄びろくをしません以前の……その婆ばのところに下男奉公かかあ、女房かかあも女中奉公かかあをしたものだそうで。……婆ばがえろう家来か扱いにするのでございますが、石松獵師がきも、堅かい親仁おやじで、はなはだしく御主人ごしゆじんに奉たつておりますので。……

宵よいの雨が雪になりまして、その年の初雪が思いのほか、夜半よなかを掛けて積もりました。山の猪しし、兎うさぎが慌あわてます。獐しんはこういう時だと、夜更よふけに、のそのそと起きて、鉄砲てつぱうしらべをして、焔端ろばたで茶漬ちやづけを搔かつ食らつて、手製てづくりの猿さるの皮の毛頭巾けずきんを被かぶつた。筵むしろの戸口へ、白髪しろがを振り乱して、蕎麦切色そばきりいろの禪ぜん……いやな奴やつで、とき色の禿はげたのを不断つづまきます、尻しり端折りばしよりで、六十九歳の代官婆しろばが、跣足はだしで雪の中に突つ立ちました。(内へ怪ばけものが出た、来てくれせえ。)と顔が色んしよく、手ぶりで喘あえいで言うので。……こんな時鉄砲は強つようございますよ、ガチリ、実弾たまたをこめました。……旧主人の後室様ごうしゆじんごうしやうがお跣足はだしでございますから、石松も素跣すだん足。街道を突つ切つて蕪にら、辣らつきよう薺なづな、葱ねぎ、焔なげを、さつさつと、化けものを見届けるのじゃ、静かにということ、婆ばあが出て来ました納戸口なんどぐちから入つて、中土間へ忍しのんで、指さされるなりに、板戸の節穴ふしあなから覗のぞきますと、何と、六枚折の屏風びやうぶの裡なかに、枕まくらを並べて、と申すのが、寝てはいなかったさうでございます。若夫人わかしゆが緋ひの長襦ながじゆ袴ばかで、搔かい巻まきの襟えりの肩かたから沁すべつた半身はんしんで、画師ゑしの膝ひざに白い手をかけて俯向うつむけになりました、背中を男おとこが、撫なでさすつていたのださうで。いつもは、もんぺを穿はいて、木綿もめんのちやんちゃんこで居る嫁御よめが、その姿で、しかもそのありさまでございます。石松は化けもの以上に驚おどいたに相違ちがひございません。(おのれ、不義ふぎもの……人畜にんちく生しょう。)と代官婆しろばが土

蜘蛛ちくものようのにのさばり込んで、（やい、……動くな、その状を一寸でも動いて崩すと——鉄砲あられだぞよ、弾丸あられだぞよ。）と言う。にじり上がりの屏風の端から、鉄砲の銃口すくちをヌツと突き出して、毛の生えた墓ひきがえるのような石松が、目を光らして狙ねらつております。

人相と言ひ、場合と申し、ズドンとやりかねない勢いでございますから、画師さんは面喰めんくらつたに相違ごございますまい。（天罰は立ち処たところじゃ、足四本、手四つ、顔二つのさらしものにしてやるべ。）で、代官婆は、近所の村方四軒というもの、その足でたたき起こして廻つて、石松が鉄砲を向けたままの、そのありさまをさらしました。——夜のあけ方には、派出所の巡査おまわり、檀那寺だんなでらの和尚おしょうまで立ち会わせるといふ狂い方でございまして。学士先生の若夫人と色男の画師さんは、こうなると、緋鹿子ひがのこの扱帯しほきも藁わらすべで、彩色さいしきをした海鼠なまこのように、雪にしらけて、ぐつたりとなつたのでございます。

男はとにかく、嫁はほんとうに、うしろ手に縛くりあげると、細引を持ち出すのを、巡査おまわりが叱しかりましたが、叱しかられるとなお吼たけり立つて、たちまち、裁判所、村役場、派出所も村会も一所にして、姦通かんつうの告訴をすると、のぼせ上がるので、どこへもやらぬ監禁同様という趣で、ひとまず檀那寺まで引き上げることになりましたが、活いき証しょうこ拠こだと言ひ張つて、嫁よめに衣服きものを着きせることを肯ききませんので、巡査おまわりさんが、雪のかかった外套がいのうを掛け

まして、何と、しかし、そろそろと村の女小児こどもまであとへついで、寺へ参つたのでござい
ますが。」

境はききつつ、ただ幾度いくたびも歎息たんそくした。

「——遁にがしたのでございませうな。画師えがしさんはその夜のうちに、寺から影をかくしま
した。これはそうあるべきでございませう。——さて、聞きますれば、——倅せがれの親友、兄弟
同様の客じやから、倅同様に心得る。……半年あまりも留守を守ってさみしく一人で居る
ことゆえ、嫁女よめや、そなたも、倅せがれと思うて、つもる話もせいよ、と申して、身じまいをさ
せて、衣きものまで着かえさせ、寝る時は、にこにこ笑いながら、床を並べさせたのだと申
すことで。……嫁御よめはなるほど、わけしりの弟分の膝すかに縋すがつて泣きたいこともありまし
ろうし、芸妓げいしやでしくじるほどの画師えがしさんでございませう、背中を擦さするぐらいはしかねます
まい、……でございませうな。」

代官婆の憤り方をお察しなさりと存じます。学士先生は電報で呼ばれました。何と宥なだ
めても承知をしません。ぜひとも姦通の訴訟を起こせ。いや、恥も外聞もない、代官とい
えば帯刀じや。武士たるものは、不義ものを成敗せいばいするはかえつて名誉じや、とこうまで
間違つては事面倒で。たつて、裁判沙汰にしないとなら、生きておらぬ。咽喉のどぶえ笛鉄砲じや、

鎌腹じや、奈良井川の淵を知らぬか。……桔梗ヶ池へ身を沈める……こ、こ、この婆め、沙汰の限りな、桔梗ヶ池へ沈めますものか、身投げをしようとしたら、池が投げ出しましよう。」

と言つて、料理番は苦笑した。

「また、今時に珍しい、学校でも、倫理、道徳、修身の方を御研究もなされれば、お教えもなさいます、学士は至つての御孝心。かねて評判な方で、嫁御をいたわる傍の目には、ちと弱すぎると思うほどなのでございますから、困じ果てて、何とも申しわけも面目もなけれども、とにかく一度、この土地へ来てもらいたい。万事はその上で。と言う——学士先生から画師さんへのお頼みでございます。」

さて、これは決闘状より可恐しい。……もちろん、村でも不義ものの面へ、唾と石とを、人間の道のためとか申して騒ぐ方が多い真中でございますから。……どの面さげて画師さんが奈良井へ二度面がさらされましよう、旦那。」

「これは何と言われても来られまいなあ。」

「と言つて、学士先生との義理合ひでは来ないわけにはまいりますまい。ところで、その画師さんは、その時、どこに居たと思し召します。……いろいろのことから、怪しからん、横

こぞつぽ 頬ほを撲はつたという細君の、袖そでのかげに、申しわけのない親御たちのお位牌いはいから頭をか
くして、尻しりも足もわなわなと震えていましたので、弱った方でございます。……必ず、連
れて参ります——と代官婆ばばに、誓ちかつて約束をなさいまして、学士先生は東京へ立たれまし
た。

その上京中。その間のことなのでございます、——柳橋の蓑みの吉姉きちねえさん……お艶様が……
……ここへお泊まりになりましたのは。……」

六

「——どんな用事の御都合にいたせ、夜中、近所が静まりましたから、お艶様が、おた
ずねになろうというのが、代官婆とところの処と承うつては、一人ではお出し申されません。ただ道
だけ聞けば、このことでございましたけれども、おともが直接じかについて悪ければ、垣根かきね、
裏口にでもひそみまして、内々守つて進じようで……帳場が相談をしまして、その人選に
当たりましたのが、この、ふつつかな私てまいなんでございました。……

お支度したくがよろしくばと、私てまい、これへ……このお座敷へ提ちようちん灯あかりを持って伺いますと……」

「ああ、二つ巴どもえの紋のだね。」と、つい誘われるように境が言った。

「へい。」

と暗く、含むような、頤おとがで返事を吸って、

「よく御存じで。」

「二度まで、湯殿に点ついていて、知っていますよ。」

「へい、湯殿に……湯殿に提灯を点つけますようなことはございませんが、——それとも、

へーい。」

この様子では、今しがた庭を行く時、この料理番とともに提灯が通ったなどとは言い出せまい。境は話を促した。

「それから。」

「ちと変な気がいたしますが。——ええ、ざっとお支度済みで、二度めの湯上がりに薄化粧をなすつた、めしものの藍あいな鼠ねずみがお顔の影に藤ふじ色いろになって見えますまで、お色の白さつたらありません、姿見の前で……」

境が思わず振り返つたことは言うまでもない。

「金の吸口くちで、烏しゃくど金で張つた煙管きせるで、ちよつと歯を染めなさつたように見えます。懐か

紙をな、眉にあてて私を、おも長に御覧なすつて、

——似合いますか。——

「むむ、む。」と言う境の声は、氷を頬張つたように咽喉に支えた。

「豊のへりが、桔梗で白いように見えました。

（ええ、勿体ないほどお似合いで。）と言うのを聞いて、懐紙をおのけになると、眉のあとがいま剃立ての真青で。……（桔梗ヶ池の奥様とは？）——（お姉妹……いや一倍お綺麗で）と罰もあたれ、そう申さずにはおられなかつたのでございます。

ここをお聞きなさいまし。」……

（お艶さん、どうしましょう。）

「雪がちらちら雨まじりで降る中を、破れた蛇目傘で、見すぼらしい半纏で、意気にやつれた画師さんの細君が、男を寝取つた情婦とも言わず、お艶様——本妻が、その体では、情婦だつて工面は悪うございます。目を煩らつて、しばらく親許へ、納屋同然な二階借りで引き籠もつて、内職に、娘子供に長唄なんか、さらつて暮らしていなさるところへ、思い余つて、細君が訪ねたのでございます。」

（お艶さん、わたし私はそう存じます。私が、あなた貴女ほどお美しければ、「こんな女房がついています。何の夫が、きそかいどう木曾街道の女なんぞに。」とまおとこ姦通呼ばわりをするそのばばあ婆に、そう言つてやるのが一番早分りがすると思います。）（ええ、何よりですともさ。それよりか、なおその上に、「お妾でさえこのくらいだ。」と言つて私を見せ^{わたし}てやります方が、上になお奥さんという、奥行があつてようございます。——「奥さんのほかに、私ほどのいろがついています。田舎で意地ぎたなをするもんですか。」ばばあ婆にそう言つてやりましようよ。そのお嫁さんのためにも。——

「——あとで、お艶様の、したためもの、かきおきなどに、この様子が見えることに、何ともどうも、つい立ち至つたのでございまして。……これでございますから、何の木曾のやまざる山猿なんか。しかし、念のために土地の女の風俗を見ようと、山王様御参詣は、その下心だつたかとも存じられます。……ところを、桔梗ヶ池の、すじ凄^い、美しいお方のことをおききなすつて、これが時々人目にも触れるというので、自然、代官婆の目にもとまつていて、自分の容色きりようの見劣りがする段には、美しさで勝つことはできない、という覚悟だつたと思われます。——もつとも西洋剃刀かみそりをお持ちだつたほどで。——それでいけなけ

れば、世の中に煩い婆、人だすけに切つちまう——それも、かきおきにございました。

雪道を雁股^{かりまた}まで、棒端^{ぼうばな}をさして、奈良井川の枝流れの、青白いつつみを参りました。氷のような月が皎々^{こうこう}と冴えながら、山気が霧に凝つて包みます。巖石^{がんせき}、がらがらの細谿^{そたにがわ}川が、寒さに水涸^{みずが}れして、さらさらさらさら、……ああ、ちようど、あの音、……洗面所の、あの音でございます。

「ちよつと、あの水口を留めて来ないか、身体^{からだ}の筋々へ沁み渡るようだ。」

「御同然でございまして……ええ、しかし、どうも。」

「一人じゃいけないかね。」

「貴方^{あなたさま}様は？」

「いや、なに、どうしたんだい、それから。」

「岩と岩に、土橋が架^かかりまして、向うに槐^{えんじゆ}の大きいのが枯れて立ちます。それが危なしく、水で揺れるように月影に見えました時、ジイト、私の持ちました提灯^{ちようちん}の蝋燭^{ろうそく}が煮えまして、ぼんやり灯^ひを引きます。（暗くなると、巴^{ともえ}が一つになつて、人魂^{ひとたま}の黒いのが歩^{ある}行くようね。）お艷様の言葉に——私^{てまい}はッとして覗^{のぞ}きますと、不注意にも、何にも、お綺麗^{きれい}さに、そわつきましたか、ともしかけが乏しくなつて、かえの蝋燭が入れてご

ございません。——おつき申してはおります、月夜だし、足許あしもとに差支さしつかえはございません
 ようなものの、当館の紋の提灯は、ちよつと土地では幅が利きます。あなたのおためにと
 思いまして、道はまだ半町足らず、つい一つ走りで、駈かけ戻りました。これが間違いでご
 ざいました。」

声こゑも、言ことも、しばらく途絶えた。

「裏土堀うらんどほりから台所口へ、……まだ入りませんさきに、ドーンと天狗星てんぐぼしの落ちたような
 音がしました。ドーンと飴こたまを返しました。鉄砲でございます。」

「……………」

「びつくりして土手へ出ますと、川べりに、薄い銀のようでございましたお姿が見えませ
 ん。提灯も何も押おつ放ほり出して、自分でわつと言って駈かけつけますと、居い処どころが少しずれ
 て、バツタリと土手つ腹の雪を枕まくらに、帯腰が谿川の石に倒れておいででした。（寒いわ。）
 と現うつのように、（ああ、冷たい。）とおっしゃると、その唇くちびるから糸のように、三条みすじに分か
 れた血が垂れました。」

——何とも、かとも、おいたわしいことに——裾すそをつつもうといたします、乱れ褌づまの友
 染うぜんが、色をそのままに岩に凍りついて、霜の秋草に触さわるようだったのでございます。——

一人も立ち会い、抱き起こし申す縮緬ちりめんが、氷でバリバリと音がしまして、古襖ふるぶすまから錦絵にしきえを剥はがすようで、この方が、お身体からだを裂く思いがしました。胸に溜たまった血は暖かく流れましたのに。――

撃ちましたのは石松で。――親仁おやじが、生計くらひの苦しさから、今夜こそは、どうしても獲えものをと、しとぎ餅もちで山の神を祈いのつて出ました。玉味噌たまみそを塗なすつて、串くしにさして焼いて持ちます、その握飯にぎいには、魔まが寄ると申します。がりがり橋はしという、その土橋つちばしにかかりますと、お艶おえん様の方では人が来るのを、よけようと、水が少ないから、つい川の岩に片足おかけなすつた。桔梗ききょうヶ池いけの怪しい奥様おくさまが、水の上を横に伝うと見て、パツと臥打ふしうちに狙ねらいをつけた。俺おれは魔まを退治たいぢたのだ、村方むらかたのために。と言いつて、いまもって狂くるつております。――

旦那だんな、旦那だんな、旦那だんな、提灯ていとうが、あれへ、あ、あの、湯ゆどのの橋はしから、……あ、あ、ああ、旦那だんな、向むかうから、私わたしが来きます、私わたしとおなじ男おとこが参まゐります。や、並ならんで、お艶おえん様さまが。――
境も齒はの根ねをくいしめて、

「しつかりしろ、可恐おそろしくはない、可恐おそろしくはない。……怨うらまれるわけはない。」
電燈でんとうの球たまが巴まになつて、黒くふわりと浮くと、炬燵こたつの上に提灯ていとうがぼうと掛かつた。

「似合いますか。」

座敷は一面の水に見えて、雪の気はいが、白い桔梗の汀みぎわに咲いたように畳に乱れ敷いた。

青空文庫情報

底本：「現代日本文学館3 幸田露伴・泉鏡花」文藝春秋

1968（昭和43）年10月1日第1刷

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

初出：「苦楽」

1924（大正13）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：鈴木厚司

2001年6月7日公開

2005年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眉かくしの霊

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>